



第 57 回 ー纏向遺跡ー その3

纏向遺跡は古代都市「見える化」目指すという特集記事が朝日新聞（2018,4,27 奈良版）で報道されている。2012年に桜井市纏向学研究センターが3～4世紀にわたって作られた纏向遺跡の調査研究の拠点として開設された。現在、発掘が進められているが全体の広さ南北約1.5km、東西約2kmに対して調査発掘の面積は未だ2%にも満たない。発掘調査の後、当然のことながら土地は埋め戻されて看板が立っているだけだから、遺跡をイメージすることなどはできない。2018年4月にJR桜井線巻向駅北側の辻地区では、「見える化の第一歩」として大型建物を含む3棟の跡に65本の柱を立て、建物群の大きさをイメージしやすくしている。この一帯の土地は周辺より少し高くなっており、初期大和王権は発祥の際、そうした場所を選んだ可能性があると考えられている。

そこから南に約150mの太田地区には纏向遺跡のガイダンス施設が立つ予定で、完成すれば遺跡巡りの拠点となることが期待されている。辻地区から太田地区への細い道はわずかに下がったのち、また上がるという高低差があり、そこには川があったことが発掘調査で分かっている。JRの線路を東に越えると、ホケノ山古墳がある。3世紀中ごろの全長約80メートルの前方後円墳で、埋葬施設が復元されている。この墳丘に上ると、運河が縦横に走っている纏向遺跡の全容を見ることができる。遺跡の調査は現在も進行中で、今後も発掘と整備の両面で纏向遺跡の「見える化」が進むことと期待されている。2012年に桜井市纏向学研究センターが開設されたホームページから報告書や研究紀要を無料でダウンロードできる。（<http://www.makimukugaku.jp>）

この70年間の考古学は、発掘された遺跡や遺物の急速な増加による比較検討の幅が広がったこと、計測や科学的分析方法の発達により不明であった諸点が明らかになったこと、国際的に朝鮮半島・中国さらにはユーラシア大陸の遺跡発掘、分析データとの比較が可能になったことを主な理由に急速に発展した。これらは情報技術革新によるグローバル化の成果とも云える。研究のデータも方法もまたたく間に広がり、研究のスピードもこれまでは考えられなかったほど早くなっている。一方、文献史学も解釈の諸技術を高め、精緻な研究がなされるようになってきた。考古学が文献史学を刺激し、考古学もその成果を踏まえて発掘するという好循環が続いてきた。

箸墓古墳に代表される出現期の大型前方後円墳は3世紀中葉頃には出現していたと推定されることが、最近の考古学的研究の結果で明らかになってきた。考古学的な埴輪や副葬品である三角縁神獣鏡の考古学的研究結果と、炭素14年代を年輪年代法で補正する較正炭素年代法による自然科学結果がほぼ完全に一致し、その年代は疑い難いのである。このことは古墳造営の背景にある「ヤマト政権」と呼ばれる広域の政治連合がこの段階には成立していたことを示すものである。出現期の前方後円墳は、後に畿内と呼ばれる近畿中央部から、瀬戸内海沿岸各地をへて北部九州に至る地域に広く営まれている。このことは、3世紀中葉頃には少なくとも瀬戸内海沿岸から北部九州に及ぶ地域が、箸墓古墳（奈良県桜井市）の所在する畿内大和を中心とする広域首長連合、すなわち初期ヤマト政権に加わっていたことを明確に示している。

弥生時代前・中期以来3世紀初頭頃まで、朝鮮半島東南部の弁辰からの鉄資源をはじめとする先進的文物の輸入ルートを支配していたのは、北部九州の玄界灘沿岸地域であったことは疑いない。畿内や瀬戸内海沿岸地域が鉄資源の安定的入手を確保するには、これらの諸地域が連合して玄界灘沿岸地域から、その輸入ルートの支配権を奪うほかはなかったものと思われる。まさにそのために形成されたのが邪馬台国を盟主とする畿内から瀬戸内海沿岸諸地域の広域連合であり、そして制圧した北部九州地域を含む新邪馬台国連合が成立したと考えられている。「魏志」倭人伝によれば、連合の盟主である邪馬台国は玄界灘沿岸の伊都国に一大率において、輸出入品などを厳しくチェックしている。それまで北部九州を中心に分布していた中国鏡が、3世紀前半になると畿内大和を中心とする分布に一変する事実も、この時期に連合が成立したことを裏付けるものであろう。玄界灘沿岸に大規模な出現期古墳が見いだせないこともこのことと関連しているのである。

(岡野 実)

